

## 好酸球性気管支炎と気管支喘息の気道炎症の相違点 ～気道炎症の深達度に基づく治療戦略の確立～

金澤 博, 吉井 直子, 山田 一宏, 山本 典雄, 小西 一央, 宇治 正人,  
田中 秀典, 渡辺 徹也, 松浦 邦臣, 浅井 一久, 栩野 吉弘, 鴨井 博,  
平田 一人

大阪市立大学大学院医学研究科 呼吸器内科学

非喘息性好酸球性気管支炎 (non-asthmatic eosinophilic bronchitis (EB)) は、喘鳴を伴わない慢性咳嗽を主たる症状とし、喀痰中の好酸球増多を認めるものの、喘息の生理学的特徴である変動性気流閉塞や気道過敏性亢進を欠く病態である。従って、好酸球性気管支炎と喘息の気道炎症の類似点・相違点を詳細に検討することにより、慢性咳嗽、変動性の気流閉塞、気道過敏性亢進のメカニズムの理解に寄与する可能性がある。

11例の健常者、20例のICS未治療喘息患者、19例のICS治療中喘息患者、18例の好酸球性気管支炎患者を対象に、肺機能検査、メサコリン気道過敏性試験、誘発喀痰中の好酸球比率を測定した。さらに、我々の教室で考案した気道微小循環系の血管透過性を定量化する指標を用いて、血管透過性の強度を比較検討した。

好酸球性気管支炎患者では、肺機能検査上閉塞性障害は存在せず、気道過敏性も認めなかった。しかしながら、誘発喀痰中の好酸球比率は、ICS未治療喘息患者と同等であり、ICS治療中喘息患者より有意に高値を示した。また、気道微小循環系の血管透過性の強度は、ICS未治療喘息患者、ICS治療中喘息患者に比較し、好酸球性気管支炎患者は有意に低値であり、健常者と同等であった。

好酸球性気管支炎患者の気道表層の炎症の程度は、喘息患者と同等と考えられた。しかしながら、より深層への炎症の進展は認めない。従って、好酸球性気管支炎では気道内腔側からの薬剤投与で十分な臨床効果が期待できる。